

共感し合いながら友達とかかわり 協同して遊ぶ子どもを目指して
— 造形表現活動を中心に —

原田和幸※1 高木留美子※1 稲吉幸恵※1
下川めぐみ※1 宮地哲史※1 近藤真紀※1 朝長久美子※1
井口均※2 森野美央※2 小西祐馬※2
※1 附属幼稚園 ※2 教育学部

1 はじめに

本研究は、2014 年度に始まった長崎大学教育学部教員と附属幼稚園教員との共同研究について、今年度の成果をまとめたものである。

平成 22 年 11 月に幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議より、「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について」という報告が出された。その中で、「幼児期の教育と児童期の教育は、それぞれの段階における役割と責任を果たすとともに、子どもの発達や学びの連続性を保障するため、両者の教育が円滑に接続し、教育の連続性・一貫性を確保し、子どもに対して体系的な教育が組織的に行われることは極めて重要である」と、幼小接続の重要性が明記されていた。しかし、実態は、ほぼ 100%の地方公共団体がその重要性は理解しつつも、そのうちの約 80%が取組を行っていないという結果が出ており、（平成 21 年 11 月に文部科学省が実施した都道府県・市町村教育委員会に対する調査より）この結果を受けて、平成 20 年度に文部科学省が行った幼児教育実態調査においては、「幼稚園と小学校が教育課程の編成について連携している」とする幼稚園は 16%にとどまっているとなっていた。また、具体的に両者のつながりを見取っていく方策として、「幼児期と児童期の教育活動には、学びの芽生えの時期と自覚的な学びの時期という発達の段階の違いからくる、遊びの中での学びと各教科等の授業を通した学習という違いがあるものの、直接的・具体的な対象とのかかわり、すなわち「人とのかかわり」と「ものとのかかわり」という捉え方で双方の教育活動のつながりを見通しつつ、幼児期における遊びの中での学びと児童期における各教科等の授業を通した学習を展開することが必要である」とした上で、「幼児期の終わりには自覚的な学びの芽生えが育ってきており、このため、教科指導こそ行わないものの、気のあった仲間同士の活動だけでなくクラスにおける共通の目標を意識したり、自分の役割を理解したりして、集団の一員としての自覚を育てる活動を重視したり、今まで遊びを通して学んできた知・徳・体の芽生えを総合化し、小学校に向けて学びを高めていくための教育課程の編成・実施が必要となる」と記されていた。

本園では、昨年度までの研究テーマを、『小学校以降の学びを見通した幼児の学びの探求～ICT などを活用した観察記録・分析の工夫・改善を中心に～』として、幼児期における学びとはいったい何なのか、生活の中でどのような学びが見られるのか、その学びを高めていくためにはどのようなことが必要であるのかについて考えを深めてきた。具体的には、抽出児の観察を通して、子どもの学びの姿を記録・分析・蓄積し、子ども理解を深めた。この研究を通して、子どもの言動には全て意味があること、そしてそのことを保育者が理解し、子どもの思いを受け止め、その思いに寄り添った保育を行うことの重要性を実感した。また、子どもの言動に対する保育者の見方が肯定的に変化し、子どものよさが見えてきたという成果も挙げた。

多くの成果を得たが、課題も残った。それは、幼児理解は進んでいるが、そのことが具体的な手立てや方法となって保育に生かされていないということであった。そのため今年度からは、幼小接続を見通した幼児理解の一步先を目指して、子どもの姿を次の保育とどうつなげていくのかについて、力を入れて研究していきたいと考えるに至ったのである。

前に引用した報告には、「幼児期は、自覚的な学びへと至る前の段階の発達の時期であり、この時期の幼児には遊びにおける楽しさからくる意欲や遊びに熱中する集中心、遊びでの関わりの中での気づきが生まれてくる。こうした学びの芽生えが育っていき、それが小学校に入り、自覚的な学びへと成長していく」とし、「幼児期から児童期にかけては、学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開することが必要である」と述べられていた。その例として、「調べる、比べる、尋ねる、協同するなどの様々な手法を組み合わせて楽しみながら課題を見だし解決する取組を通じて、学びの芽生えから自覚的に学ぶ意識へとつながっていくよう、学びの芽生えのための活動を展開することが求められる」とあった。そこで本園では、幼小接続を図るための具体的な手立てや、現代社会が抱える問題などを踏まえて、集団の中で自分の考えを意欲的に表現し、「ひと・もの・こと」と関わりながら自ら学んでいく力が重要であると考え、幼児期における「主体性」と「協同性」に着目し、考えを深めていくこととし、本年度からの研究テーマを、『共感し合いながら友達とかかわり協同して遊ぶ子どもを目指して』とした。この研究を通して、幼児期における主体性や協同性がどの時期に、どのような体験を通して身に付いていっているのか、また、どの時期に、どのような体験を仕組むことが必要であるかについて各年齢毎に継続的・系統的に見取っていきたいと考えている。更に今年度は、その視点として、「造形表現活動」に注目することにした。「造形表現活動」は、子どもが夢中になれる代表的遊びの一つであり、その表現には子どもの意味付けやストーリーが込められている。幼稚園要領の「表現」の領域には、「感じたことや考えたことを自分なりに表現すること」とあり、表現で「表されるもの」は、「内面にあるもの」と不可分であり、「内面にあるもの」が周囲に認められ、応答や対話を楽しむことによって「表されるもの」がより高まっていくと考える。本園の園児は毎日自分の遊びに応じて様々なものをつくって楽しんでいるという実情を踏まえて、主体的にものごとにかかわり、夢中になれる活動内容として位置付け、協同性を培う上での有効性を視野に、今回の研究における幼児観察及び保育の手立てを検討する切り口として位置づけた。

2 附属幼稚園における今年度の取組

本研究は3か年の計画で進めており、今年度がその1年目である。3か年の研究の計画は次のようになっている。

〈1年次〉2014年度

- ・研究テーマの決定
- ・主題設定の理由、研究方法の決定
- ・保育のつながりを意識した事例の蓄積（「主体性」や「協同性」に着目して）
- ・全国造形大会（公開保育）
- ・子どもの活動の図（活動の記録）の作成（全国造形大会の取組の一環として）
- ・3か年の計画

〈2 年次〉2015 年度

- ・子どもの活動の図（活動の記録）の書き方の再考と平成 27 年度版の作成
- ・事例のとり方の検証，実践
- ・研究方法や具体的な取組の検証
- ・指導案の形式の改善
- ・教育課程の見直し・次年度分の作成

〈3 年次〉2016 年度

- ・事例の蓄積
- ・子どもの活動一覧（活動の記録）の作成（平成 28 年度版）
- ・研究の検証
- ・本研究の成果と課題まとめ

ここからは，今年度行った具体的な研究の内容について触れていく。

（1）事例のとり方の改善

昨年度までの研究で，各クラス抽出児を決めて，その子どもの事例を取ることで幼児理解を深めていった。その取組は一定の成果を上げ，子ども理解をより深め，保育改善を図っていくための有効な手立てとなると考え，継続していくこととした。下に示しているのは，昨年度まで使っていた観察の視点である。これは，ニュージーランドのテ・ファリキを原理とする 5 観点を基にしているもので，子どもの姿を分類し，理解を深めるのに有効であったため，この視点は本年度も継続して使っている。

子どもを見取る際の 5 観点

『関心をもつ姿』

『熱中する姿』

『困難を乗り越えようとする姿』

『自分の考えや気持ちを様々な方法で表現しようとする姿』

『他児または他者の立場から物事を見ようとする姿』

では，ここからは昨年度から工夫・改善したことを 3 つ挙げる。

①「造形表現活動」を中心に事例を記録していく。

様々な遊びの中で協同性が見られると考えるが，今年度は研究一年目ということもあり，視点をしぼって子どもの姿を見取っていき，保育の系統性や継続性などについても考察できるようにした。一つの遊びに着目したが，その遊びについて環境構成や保育者のかかわりなどを工夫・改善していったことで，他の遊びについてもそこでしたことが還元されていった。

②保育のつながりを意識して事例を取る。

本園で事例を書く際に，「事例」，「保育者の振り返り」，「保育カンファレンス」，「次にどうしたいのか・どうすればいいのか」という順で項目を挙げている。昨年度までは，各保育者が事例を取り，保育者の振り返りまでを記入したものを蓄積し，定期的に本園の職員によるカンファレンスや大学の先生方とのカンファレンスを行い，その後，保育カンファレンスと次にどうしたいのかという項目についてまとめていた。しかし，

それでは事例の中の子どもの姿が単発的で、保育のつながりがなかなか見えてこないということと、保育改善が遅れてしまうということなどから、保育者が事例に対して「次にどうしたいか」まで全て記入し、さらにその事例を基に次に行った保育を記録していくというように改善を図った。すると普段の保育も、前回の反省を踏まえた環境構成や教師のかかわりを考えたり、子どもの言葉からヒントを得た環境を準備したりして、その重要性をより強く実感することとなり、それが保育改善を図ろうとする保育者の姿へと繋がった。

③事例に本年の研究に沿った視点を書き加えた。

今年度からの研究テーマにもある、「協同性」についての考察を深めるために、保育者が子どものどのような姿を見取って取り上げた事例なのかについて、本年度の研究内容に沿った保育者の視点を書き加えることとした。これまで事例を挙げる際には、事例NO.、その事例を端的に表す題、日付をまず記入していたが、事例をより深く検討していくと、保育者が子どものどのような姿を見取って取り上げた事例なのかを示すことで、本研究に沿った視点が明確になり、事例と事例のつながりを考察する際の手がかりにもなるということに気づき、事例に書き込むことにした。その項目は、下の通りである。

☆【子どもの姿】に関すること

「熱中する姿」、「共感し合う姿」、「人とかかわる姿」、「協同して遊ぶ姿」

☆【保育者のかかわり】に関すること

「主体的に遊べるような保育者の援助」、「協同して遊べるような保育者の援助」

次に、具体的な事例を例に挙げて、どのような子どもの姿を見取ったのか説明する。

年少児・I子

保育者はI子が友達に関心をもつ姿や、好きな遊びを夢中になって楽しむ姿から、今後友達とどのようにかかわっていくのか、そしてどのような遊びを楽しむのかを見取っていくために事例を取り始めた。ここでは事例8を例に挙げる。

事例8 「Iちゃんもする!」「Iちゃんが飾り付けしたんです。」 7月4日・7日

☆熱中する姿☆協同して遊べるような保育者の援助

〈7月4日〉

7月2日、みんなで作った怪獣を私が手動で動かすと、ヒーローになりきったB男、E男が怪獣を新聞紙で作った剣でついたり、キックやパンチをしたりして怪獣を壊してしまった。

そもそも怪獣をつくらうとしたきっかけは、たたかいごっこで、敵がいらないとおもしろくないから、つくりたいというものであった。子どもたちは担任と相談しながら、段ボール箱を組み合わせで怪獣をつかった。つくった怪獣に色を塗りたいと言い、みんなで黒く塗った。すると、黒=男の怪獣というイメージだったのか、つくった怪獣は、『お父さん怪獣』になった。

しかし、ここで、みんなで作った怪獣を壊したくない、でもたたかいごっこに使いたいという二つの思いが子どもたちの言葉からうかがえた。

たたかいごっこで楽しんだ後は、壊れた怪獣が可哀想になってしまう子どもたち。壊れた怪獣を修理する。修理してまた戦いごっこに使い、また修理する・・・この繰り返しが続いた。

すると、E子が、
E子「ねえ、お母さん怪獣がいればいいのにねえ。」と言う。どうしてなのかと問うと、
E子「だって、さびしいから。」と言う。それを聞いていたI子が話に加わってきた。
I子「そうだねえ、いればいいのにねえ。」
E子「いればいいねえ。」
T「じゃあ、どうしようか。」
E子「つくればいい。」
I子「つくればいい！Iちゃんもする！」
T「そうかあ、つくったらいいのかあ。お母さんってどんな怪獣なの？」
E子「あのね、ピンク。」
I子「ピンク。かわいいんだよ。」
T「お母さんってどれくらいの大きさなのかな。」
E子「これくらい！（両手を広げるが、お父さん怪獣よりも小さい）」
I子「Iちゃんもこれくらい！（同じように両手を広げる）」
T「じゃあ、お母さん怪獣もつくってみる？」
E子「うん。リボン付ける。」
I子「Iちゃんもする！」
E子「つくったら、こうする。」（抱きかかえるポーズ）
T「どうしてそうするの？」
E子「だって、かわいいもん。」
I子「かわいいよね。」
T「お母さん怪獣かわいいの？」
E子「うん。ふわふわって。」
I子「Iちゃんもこうする！」（抱きかかえるポーズ）

〈7月4日〉

お母さん怪獣をつくると言っていたE子とI子が朝の支度を終えた頃、保育者から先日のことを受けて二人を怪獣づくりに誘ってみた。

T「お母さん怪獣つくる？」

E子「つくる。」

その言葉を聞いていたI子も側に来る。

I子「Iちゃんも！」

E子の言っていたお母さん怪獣のイメージがどういうものかと保育者なりに考え、材料を準備しておいた。すると、段ボール箱の中からいくつか選んだE子。

E子「これ。つくる。」

T「どうする？くつつける？」

E子「うん。これ。」そう言って、お父さん怪獣に貼り付けてあるガムテープを指差す。ガムテープを保育者が切る。E子、I子が貼り付ける。すると、F子も仲間に入ってきた。

F子「仲間に入れて。F子ちゃんも、それする。」

J子「仲間に入れて。怪獣つくる。」

I子「いいよ。」

E子「これを貼ってるんだよ。」とF子、J子に説明する。

すると、何となく怪獣らしい形になってきたそのとき、

E子が言う。

E子「お母さんにも、これを付けたいの。」

これとは、お父さん怪獣に付いている鱗のことである。

T 「どんなの？」と聞く。鱗の形や色を保育者は子どもたちのイメージから引き出したかった。すると、

E子「ピンク。」

F子「黄色。これとか、これとか。（三角形、四角形）（『お父さん怪獣』を指差しながら）丸いのか。」

I子「Iちゃんも。」

J子「目も描く！」

E子「私も描く！」

そう言って白い画用紙に目を描いた2人。まつげも描く。そして、いろいろな形や素材のうろこを貼り付けて、『お母さん怪獣』をつくった。その後も何人かの女兒が仲間に入ってきた。男児も仲間に入って遊んだ。15分くらい遊び続けた。出来上がるとE子が怪獣に抱きついた。

E子「かわいい。」その後、そこにいたみんなと抱きついた。そして、抱えて運ぼうとする。

T 「どうするの？」

I子「抱っこしてるの。」

E子「違うよ。お父さんの所に行くの。」どうやら、お父さん怪獣の横に並べたいらしい。保育者も手伝って、2体が並んだ。

その日の降園前のひとときの際、つくった『お母さん怪獣』をみんなで見えた。つくった子どもたちが話をする。I子もみんなの前で言った。

I子「Iちゃんが飾り付けしたんです。」

保育者の振り返り

事例7にあるように、絵描き、粘土が好きなI子。これまでに、I子の好きな遊びができる環境に加え、少しずついろいろな遊びにも目が向くように、そして、遊びを通して友達の世界を感じるように・・・と考えて環境を構成してきた。Ⅱ期になって、園生活にも慣れ、友達の存在を感じつつ遊んでいるI子の姿が見られるようになった。この頃のI子は、友達がしている遊びにも興味をもち、仲間に入ることが多くなった。この事例もその一例である。この事例のI子は友達の言うこと、することを真似ている。それだけ、友達の存在がI子にとって大きなものになっているのだと感じた。この時期の発達段階らしいと感じられたのが、「Iちゃんが飾り付けしたんです！」というI子の発表の言葉である。友達と一緒に遊んでいても、この言葉にあるように「Iちゃん**が**」であり、「Iちゃん**も**」ではないのである。この時期の遊び（並行遊び）を物語っている言葉であった。

保育カンファレンス

I子の「Iちゃんが飾り付けしたんです。」という言葉については、やはりこの時期の3歳児の子ども様子を如実に表していると言える。I子のみならず、一緒に遊んでいた子どもたちは「みんなと一緒につくっている。」という意識はないが、このような遊びの積み重ねが、後々協同性を意識した遊びへと発展していくことを考えると、やはり、子どもたちの遊びを保育者がよく観察し、ただ子どもが好きに遊ぶという環境ではなく、保育者が意図的・計画的に環境を設定することの必要性を強く感じた。

大学の先生とのカンファレンス

- ・I 子の遊びへのこだわりが、強すぎるのであれば、安定性を求めていると捉える。遊びそのものを楽しんでいるのであれば、その子の世界がその遊びの中にあるのだと前向きに捉えればよい。

→確かに、I 期の最初の頃の I 子は、自分の好きな絵描きや粘土で遊ぶことで安定を求めているのかもしれない。しかし、徐々に園生活に慣れるにしたがって、当然、絵描きや粘土も好きで遊ぶのだが、遊びながら友達の遊びを見ていたり、友達とかかわっていたことを考えると、自分の好きな遊びの中に I 子の世界があってそれを楽しむ姿に変容してきたのではないかと思った。

この事例は、子どもの熱中する姿を捉え、その遊びが協同して遊ぶ姿へとつながっていくようにと保育者が援助を考えたものである。しかし、保育者の振り返りにあるように、保育者はこの援助は I 子にとっては時期尚早だったと振り返っている。他の園児にとっては有効であると感じたことも、その子どもに合っているのかを検証し、必要であれば別の手立てを講じなければいけないと考えた。年少児期には年少児なりの協同性が見られると考えるが、その時期、その子どもに合った援助を行っていくことが必要不可欠であるということをこの事例からより深く理解することができた。

次は、年中組の事例を挙げる。

年中児・I 男

保育者は、園生活の中で、なかなか自分の気持ちを切り替えられない I 男のことが気になり、事例を取り始めた。事例を取っていく中で I 男理解を深め、興味関心に応じた環境を整えたり、保育者と安心して接することのできる関係を築いたりしていったことで、I 男は気持ちが安定し、伸び伸びと自分の思いを出して遊ぶようになってきた。ここでは事例 12 と 15 を例に挙げる。

事例 12 「ウレタンブロックだ！」 10月8日、9日 ☆主体的に遊べるような保育者の援助

10月8日

ブロック遊びが好きな I 男の興味が広がったり、更に遊びが面白くなったり、友達と一緒につくって遊ぶきっかけになったりするのではないかと考え、保育室に大型ブロックを出していた。保育室に入ってきた I 男。

I 男 「ウレタンブロックだ！」

T 「I 男君、これ、ウレタンブロックって言うの？」

I 男 「そうだよ。前ね、これでね、I 男ね、遊んだことある。」

T 「そうなんだあ。これで遊んだことあるんだね。前って、いつ遊んだの？」

I 男 「う〜ん、いつかなあ？」

T 「ウレタンブロックっていうんだね。かつこいい名前だね。T も初めて知ったよ。」

I 男 「I 男ね、今日これで遊ぶ。」

朝の支度を終えて来た時には、K 男、L 男、H 男、D 子が大型ブロックの上を歩いて遊び始めていた。I 男も加わり、上を歩いて遊び始めた。

I 男 「ちょっと、待って。」
 そう言うと、離れていたブロック同士を付け始めた。

I 男 「つなげればいいんだよ。」
 そう言うと、また、ブロックの上を歩き始めた。途中でB子も入って来た。

I 男 「そうだ、いいことを考えた。」

T 「何、何？」

I 男 「これを上に乗せればいいんじゃない。」

T 「なるほど。上に乗せてどうする？」

I 男 「ここを運転席にすればいいんだよ。」 「ねえ、ちょっと手伝って。」

L 男 「いいよ。」
 半円柱のブロックを立方体のブロックの上に重ねる。

I 男 「これでいいんじゃない。」

T 「なるほど、運転席にするとカッコいいね。何の運転席なの？」

I 男 「新幹線！」

I 男は運転席に座る。L男がI男の後ろに座る。

I 男 「ブーン。」

T 「先生も乗せて。」

I 男 「いいよ。」

T 「ブーン。」 「I男君、新幹線速いね。」

I 男 「I男ね、新幹線乗ったことある。じいじとばあばの所に行く時、乗った。」

T 「そうなんだ。」 「新幹線カッコいいね。」

I 男 「新幹線ってね、ビューって行くんだよ。」

T 「ビューって速く走るんだね。」 「どんなふうに走るの？」

I 男 「ブーン、ブーン。」

T 「楽しいね。」

H 男 「ねえ、H男も乗せて。」

I 男 「いいよ。」

L 男 「僕も乗せて。」

I 男 「ブーン」

I 男と、H男、L男の3人は新幹線ごっこを楽しんだ。

10月9日

I男の新幹線ごっこが更にイメージが広がって楽しくなるように、前日の大型ブロックの数を増やし、三角形や円形のブロックも準備しておいた。

I 男 「今日も電車つくる。」

T 「電車つくれるように、ブロック準備しているよ。」

早速、大型ブロックをつなげ始める。K男、D男、O男、A男も大型ブロックをそれぞれにつなげて遊んでいる。

I 男 「先生、もっとブロックがほしい。」

T 「そうだねえ、お友達も使っているから、どうしようか？」

I 男 「自分で並べて電車をつくりたい。みんな使っているからI男のが足りないよ。」

T 「そうだね。もう少し欲しいね。どうしようか。」

I 男 「ねえ、貸して。」

K男 「いや。使っている。」
 I男 「もう、I男のがない！」
 T 「相談してみようか。」
 T 「ねえ、ねえ、I男君は電車をつくりたいんだって。でもこれだけじゃ足りなくて困っているんだ。どうしたらいい？」
 O男 「みんなでつくればいいんじゃない。」
 T 「なるほど。みんなでつくるのもいいね。I男君どう？」
 I男 「僕がつくりたいから、もっとブロックが欲しい。」
 K男 「じゃあ、みんなで分けて使えばいい。」
 T 「なるほど。そうする？」
 I男 「もっといる。」
 T 「じゃあ、貸してもらおう？」
 I男 「貸してほしい。」
 D男 「いいよ。」
 K男 「少しいいよ。」
 I男 「ありがとう。」
 T 「わあ、D男君、K男君ありがとう。これで、つくれそう？貸してもらえてよかったね。」
 I男 「うん。」
 I男は電車をつくり、運転席に座って遊んだ。

保育者の振り返り

I男の興味が大型ブロックにも向き、遊びのイメージは新幹線や電車となっていった。やはり、乗り物が好きなI男である。電車をつくりたい、それにはたくさんのブロックが必要となる、でも友達が使っているから足りない、もっとブロックがほしい、どうしよう、というI男の葛藤を感じられた。

I男は自分で自分の電車をつくりたいという強い思いがあった。その思いを実現するために、友達が使っているものを借りるという経験をしたことは、今後の友達とのかかわりを広げていくきっかけになると思う。（5観点でいうと『自分の気持ちを様々な方法で表現する姿』）

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

友達とかかわるきっかけとなるように、I男の発する言葉を傾聴し、思いを汲み取りながら、一緒に遊びを楽しんでいきたい。教師の思いが先走りしないように、I男や友達の思いを伝え合う場を確保していきたい。

事例 15 「これ、使っていいよ。」 11月12日

☆協同して遊ぶ姿

朝の支度を終えたA男がTに言ってきた。
 A男 「ねえ、ねえ、そうめん流しみたいに、長〜くつくらない？どんぐり流しつくろうよ。」
 T 「いいねえ。面白そうだね。一緒につくろうよ。」
 A男と二人で段ボールにトイレトペーパーの芯を付けていると、I男が朝の支度終わらせる前にやって来た。
 I男 「わあ、面白そう。I男もやる！」
 T 「うん。I男君も一緒にしようよ。早く3つの約束しておいでよ。」

I 男 「はあい。」

そこへ、B 男、L 男、M 男が来る。やがて、3 つの約束を終わらせた I 男も来る。

A 男 「どんぐり流しだからね。」 「長〜くすればいいんじゃない。」

L 男 「いいねえ。長〜くね。」

B 男 「僕もしていい？」

A 男 「いいよ。」

G 子 「G 子もする。」

I 男 「どんどんつなげれば長くなるんじゃない？」

A 男 「そうだよ。」

I 男 「いっぱい、いっぱい。つなげよう！」

5 人でのどんぐり流しづくりが進んでいく。やがて、

L 男 「あれえ、たくさんつくっていたら、ああ、筒が足りないや。」

I 男 「これ、いいよ。」

そう言って、自分が持っていたトイレットペーパーの芯を L 男に渡す。

L 男 「ありがとう。」

T 「I 男君、優しいね。L 男君、I 男君のお陰でまたつくれるよ。」

「よかったね、L 男君。」

L 男 「うん。」

T 「長くできたら、みんなでどんぐり転がしてみたいね。」

A 男 「みんなで、ようい、どんで、転がせばいいんじゃない？」

T 「そうだね、そうしよう。楽しみだね。」

しばらくして、

T 「じゃあ、どんぐり転がしてみる？」

I 男 「転がすよ。」

A 男 「先生、ようい、どんって言って！」

T 「みんないい？」

L 男・M 男・B 男 「いいよ。」

T 「じゃあ、行くよ。ようい、どん！」

どんぐりはそれぞれがつくったコースを転がっていった。

保育者の振り返り

A 男が提案し、始めたどんぐり流し遊びに興味を示し、一緒に遊びたいと思った I 男。つくりながら、L 男に材料である芯を渡した。これまで、自分がつくりたいという思いが強くあり、自分もっているものや使っているものは手放せなかった I 男だが、この日は違った。共通のものを一緒につくっているという意識があったからであろう。5 観点でいうと『他児（者）の立場から物事を見ようとする姿』)

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

更に I 男が友達とかかわりながら、共感し合い、友達とつながりをもって遊びを楽しむように、I 男の好きな制作遊びの場を、I 男の興味・関心に応じて準備したり、I 男と気の合う友達との遊びをきっかけに多くの友達との遊びが発展するように、一緒に遊びに加わり、子ども同士の関係をつないでいくようにしたい。

まず、事例 12 に関しては、I 男の興味関心を探り、それに応じた環境を整え、更に楽しむためにはどうしたらいいのかと考え、実践を行ったものである。ブロックに関心を寄せる I 男が夢中になって遊ぶ中で、友達とのかかわりが生まれている。最後には、イメージするものをつくりたいという I 男の思いを周囲の友達が受け止め、譲る場面が見られたが、保育者はこのときの経験が事例 15 での I 男の姿へと繋がったのではないかと考えた。遊びに夢中になる姿からかかわりが生まれ、かかわっていく過程で協同性が芽生えていくということが事例のつながりから少し見えてきたように思っているところである。

最後は年長組を例に挙げる。

年長児・J 男

J 男は、なかなか遊びに夢中になる姿が見られず、どのようにして援助を行っていったらいいのかを保育者が探っていくために事例を取り始めた。ここでは、事例 11 を例に挙げる。

事例 11 「葉っぱのパラダイスだね。」 11 月 27 日

☆協同して遊ぶ姿

秋が深まり、落ち葉がたくさん散るようになってきた。朝掃除や片付けの時に集まった落ち葉を袋に詰め貯めていた。たくさん集まってきた落ち葉を乾燥させようと、天気の良い日に保育室前の広場に、ブルーシートを広げ落ち葉をのせていた。シートの広さは、3×5 ㎡程度。その上にシートの底が見えないくらい、どっさりと落ち葉を乗せていた。登園すると、すぐに外の落ち葉を見付け、

J 男「何これ。」

と、大きな声で興奮気味に担任に尋ねてきた。

T 「葉っぱを乾かしてるのよ。」

J 男「遊んでもいいと。」

T 「いいよ。でも、まだ少し濡れてるかもよ。」

J 男「別にいいよ。」

普段は、汚れることが嫌いだと言っては、あまり手を出さないことが多い J 男であるが、この日は、何のためらいもなく葉っぱの広場にガサッガサッと歩いて入って行った。

J 男「葉っぱの山をつくって、その上にドッカーンって寝てみたらどう？」

T 「やってみようか。」

山をつくっていたら、周りにいた A 男が寄ってきた。

A 男「J 男くん、入れてよ。」

J 男「今、山つくってんだよ。」

A 男「分かった。じゃあ、手伝うよ。」

出来た山の上に、バシャーンと寝転んでみては、もう一回。また集めては、もう一回。そうしているうちに、周囲 5～6 人の友達も加わってきた。

G 男「あの、おじさんのように大きな山にしない。」

数日前に読んだ絵本の会話をしながら、葉っぱを集める人、山をつくる人に分かれて山づくりを楽しんでいた。

そこで、J男が、

J男「この葉っぱを、山滑り台のトンネルの中に入れてみたい。そして、（トンネルの中を）葉っぱでいっばいにしたい。」

と、担任に言ってきた。

T 「みんなに言ってみたら。」

J男「なんて？」

T 「『葉っぱをトンネルに運びたいんだけど、手伝って。』って言えばいいんじゃない。」

すると、ちょっともごもごとした感じで、

J男「葉っぱをトンネルのところまで、運びたいんだけど手伝って。」

みんな「いいよ。」

の声と同時に、大きなゴミ袋に葉っぱを入れる人、くまでで葉っぱを集める人、トラックに葉っぱを乗せて運ぶ人・・・あちらこちらで、「手伝って。」の声が響き、ワッセワッセと大量の葉っぱを山滑り台の所へと運んだ。大騒ぎして運んでいる間に、クラスの半分ほどの友達が寄ってきていた。

A男「J男くん、出していいの。」

J男「葉っぱでいっばいにするんだよ。」

みんなは、葉っぱの入った袋をトンネルの中であけだした。出口も入口もいっばい。みんな葉っぱが入ったトンネルの中をくぐりだした。

「気持ちいい。」、「寝たいね。」、「楽しい！」

J男は、何度も何度も友達と一緒にトンネルをくぐり、保育者のところに来た。

J男「大成功だ。ここは、葉っぱのパラダイスだね。」

保育者の振り返り

以前のカンファレンスで、J男は結構大胆なことをやりたいて思っているのではないかという意見をいただいた。また、＜事例7＞でも、J男がダイナミックなことをやってみたいという思いがあると感じていた。日頃、「汚れるから。」という理由で関心を示さないことが多かったが、この日は、全く気にせずに遊びに夢中になっていた。「ドッカーンって寝てみたかどうか？」という言葉からもダイナミックなことをやってみたいというJ男の野心を感じる。やってみたいが方法がわからない時、今までだったら否定的な言葉を発し、諦める姿が多かったが、まだまだ教師の力を借りてではあるが、自ら友達に声をかけ自分の思いを実現させた事例である。楽しそうに遊んでいるJ男を見て、「J男くん、入れてよ。」とA男が言い寄ってきた。友達から「入れて。」と言われた経験はあまりなかったと思われる。「ここは、葉っぱのパラダイスだね。」という言葉の中には、自分の思いが実現できた喜びと友達と一緒に活動できた喜びが含まれているように感じる。

（5観点でいうと、『熱中する姿』『自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する姿』）

保育カンファレンス

J男にとっては、自分の思いを教師に受けとめてもらい、実現できたこと。さらに、そこに、友達が加わり一緒に遊べたこと。しかも、自分から発信した遊びでこんなにも盛り上がったことは、とても嬉しかったと思う。このようなことが、J男の自信につながっていくとよい。

この遊びのつながりとして、2回目の落ち葉遊びの様子はどうだったのかという問い

があった。一週間の休園の後、保存していた落ち葉を前回と同じように、シートの上に出してみた。その日は、とても天気が良く、年中児も園庭でたくさん遊んでいた。落ち葉遊びと楽しみにしていた J 男は、すぐに駆け寄ってきた。担任や隣のクラスの担任、5～6名の年長児と落ち葉をかけ合って 5 分ほど遊んでいた。透明のビニールシートを出すと、その上に葉っぱをのせ、「せ～の。」で空中に浮かばせて喜んでた。みんなが楽しそうに遊んでいる様子を見て、年中児も 10 人ほど加わって遊び出した。年中児が声をあげてはしゃぐ姿が増えると、J 男はだんだん遊びから遠のくようになった。遊びが始まって 10 分ほど経った後は、また、保育室に戻り、いつもの制作机のところに座っていた。

このことから、J 男にとっては、年中児が加わったことで自分の思いが実現できないと思ったのではないかな。その場に、教師が 2 人いたのだから、J 男の思いを受けとめ、場を分けてあげることで、また、J 男の思いが満たされたのではないかな。まだ、年中児を巻き込んで遊ぶことは、J 男にとっては困難なことだったのではないかな。

次にどうしたいのか・どうすればよいか

J 男から発信して遊びが広がるように教師が手助けしたり、じっと見守ったりする。J 男がみんなから認められることで、自信へとつなげていけるよう促していく。友達と遊ぶ楽しさや一人では出来ないことが実現できる喜びを味わわせるために、友達と一緒に活動する機会を設けていきたい。しかしながら、遊びの規模や人数、参加するメンバー（年齢）などには、配慮が必要である。

保育カンファレンス（事例 7～11）大学の先生を交えて

- ・事例 11 に関しては、自分がやりたいことを教師に受け入れられ、友達が加わることでダイナミックさが増し、自分から発信した遊びで大満足をした J 男の喜びが伝わってくる。
 - ・いつもつまらなさそうにしている J 男が、夢中になるもの（こと）は、何なのか。どうやったら、事例 11 のようにくいつくのか、深めていけたらと思う。J 男が、目を輝かせて、夢中になるものは何かを探る。
- これまで関心をもっていたもの、自分で制作したものを念頭におき、日頃の会話の中から J 男の思いを引き出し、遊びへとつなげ環境を構成していきたい。

それまでも、様々な環境を J 男の興味関心を探りながら準備してきた保育者は、落ち葉遊びに強い関心を示す J 男の姿を見取り、環境を整えた。すると、好きなことに夢中になる中で、その楽しそうな姿を見た友達が集まってきて、J 男の提案に従って、目的の一つにして力を合わせて遊びを進める姿へとつながった。この事例から、目的をもって夢中になって遊ぶ中で主体性が発揮され、それが友達とのかかわりへと繋がっていくこと、そして、そのかかわりの中で目的を共有させていくことで協同して遊ぶ姿へと繋がっていくのではないかと考察した。更に J 男に関しては、自己を発揮し、遊びを楽しむためには、保育者の存在がまだまだ必要であるため、意図的・計画的なかかわりを継続して行っていくことも必要であると考え、目の前の子どもの育ちに応じた保育者のかかわりや遊びのしかけづくりを講じていくことの必要性を再確認した。

年長児・F男

F男は入園当初から「人とかかわりたい」という強い思いをもっていたが、経験が足りなかったため、そのかわり方がわからず、時には強引に思いを通そうとしたり、叩いたり、押ししたりするなどの行動が見られた。そこで、周囲の友達と良好な関係を築いていけるようにするためには、どのような保育者の援助が必要なのかを探っていくために事例をとり続けている。ここでは事例15について取り上げる。

事例15 「大きな芋の絵!」 11月11日～11月13日 ☆協同して遊べるような保育者の援助

11月11日 芋掘り

登園してきた子どもたちは、保育室に飾られた芋の蔓を見て、「今日は芋掘りでしょう?」と楽しみにしている。F男も、「ぼく、芋掘りしたことあるんだよね～」と保育者に伝えてきた。

いざ芋掘りが始まると、「大きいのを見附けたい!」、「いっぱい見附けたい!」という思いで、固い土を掘っていく。F男もE男やG男、H男などと一緒に芋掘りを楽しんでいた。

その日の降園時に、「おおきな おおきな おいも」の本を読み、この芋掘りの体験を今後どのような遊びに繋げたいのか、子どもたちの気持ちを探った。すると、「みんなで食べたい!」、「芋掘りの絵を描きたい!」という声が多かった。絵描きに関して、「どんな紙を用意したらいい?」と尋ねると、絵本に出てきたような大きな紙がいいと大勢の子どもが言い出し、F男も「でっかいやつ!」と言っていた。具体的な大きさを尋ねると、「お部屋の端から端まで!」というところから、最終的に「運動場まで行くぐらい!」ということになった。これまでにない紙の大きさに、F男は「(そんなに大きな紙でも)描ける!」と興奮していた。

11月12日

朝の環境構成の時に、緑の道の壁一面にロール画用紙を広げておいた。子どもたちは保育室へ向かいながらその紙をじっと見たり、「これ、お芋描くやつだよね。」と会話したりしていた。保育者は始めに登園してきた子どもたちの支度が終わる頃に全体に言葉をかけた。

T 「緑の道(渡り廊下)にすごい大きな紙を用意してたんだけど気付いた?」

C 「うん! 気付いたよ!」

T 「先生、あの紙に芋掘りの絵を描こうと思うんだ! 描きたい人はスモック来ておいでね。いつ来てもいいよ!」

「F男君、昨日言ってたでっかい(強調する)紙、用意しといたよ!」

F男「行く!」

T 「んじゃ、スモック着ておいで!」

F男「うん!」(走ってスモックを取りに行き、緑の道で急いで着る。)

まず緑の道に出てきたF男とI子が絵の具の準備を始めた。

T 「F男君、何色がいい?」

F男「F男は紫がいいんだよな～。でもないなあ。」

T 「紫かあ～。無いねえ。混ぜて作れんかな?」

F男「多分作れると思うんだけど、何色と何色だったかな～。ちょっとF男忘れちゃっ

たんだよね。」

T 「ええっと、紫は赤と青じゃない？」

I子「私知ってるよ。えっとね、紫はね、赤と青を混ぜたらできるんだよ。」

T 「やっぱりそうだよね。」

I子「うん！」

F男「赤と青か。」

そう言って青の絵の具を、「このくらいかな？」などと保育者に確認しながら出し、次に赤を加えて、紫色を作った。できた絵の具の色に納得したF男は真っ白な画用紙に向かって一旦止まり、「先生！描いていいの！？」と確認した後、端から端まで一気に線を描いた。

F男とI子の姿を見た他の子どもたちも（G男、I男、O男、B子、F子、K子、P子）遊びに入ってきて思い思いに芋の絵を描いていった。芋の先端部分がF男の提案で恐竜の顔になり、「イモザウルス」になった。（絵本に出ていた）ある程度芋を描き終わると、模造紙で立体的に作った芋に色を付けたり、友達が自分のスモックに絵の具をたくさん付けて「自分が芋になった！」と喜んでいる姿を見てF男も始めたりしていた。

11月13日

今日は昨日までの環境に加えて、紙を貼ったり、立体的なものをくっ付けたりし始めるのではないかと思い、環境に加えておいた。さらに、白のロール画用紙に藍色のロール画用紙をつなげておいた。F男は登園するとすぐにスモックを着て、緑の道のお絵描きコーナーに出かけていった。

今日はふよう組のB男とふじ組の子どもが数名遊びに来ていた。昨日、自分の体やスモックに絵の具を付けて楽しんだF男は、新たに加わった材料などには目を向けず、また自分に絵の具を付け始めた。気分が乗ってきたF男は、自分の近くにいたふじ組の女児のスモックにいきなり絵の具をべったり付けた。すると相手は、「F男君、やめて！」と怒り出した。立ちつくすF男に保育者が仲介に入り、「人に付ける時は、相手の気持ちを確かめることが必要である。」ということと一緒に考えた。

再び画用紙に目が向いたF男は、昨日の芋の続きを描いていたが、自分の思いで描きたいF男と、そこに入ろうとするB男の間でトラブルが起きた。「やめて！」というF男に対して、B男は「何でダメなの！？」と引かない。だんだんとイライラしだしたF男は保育者（担任）のところにやって来て、「先生！B男君が勝手なことするんだよね。言ってもうまくいかないから、紙を広げてほしいんだよね。」と言ってきた。その後、紙を広げ、自分の思う絵を描いたF男であった。

保育者の振り返り

以前、個人の絵を描くときのことを事例に取り上げたが、今回は集団で絵を描く機会を設けた。混色の仕方などについて迷うこともあったが、困ったことを言葉に出しながら解決していき、久しぶりに派手に造形遊びを楽しむ姿となった。真っ白の大きな画用紙に、トップバッターで筆を入れる姿に、F男の「したい！」「楽しい！」という前向きな気持ちがひしひしと伝わってきた。（『関心をもつ姿』『熱中する姿』）

お絵描き2日目には、いくつかトラブルがあったが、「自分の思いを一方的に相手にぶつけたら怒らせてしまった」、「自分が思っていることが相手に伝わらない」という

ような友達と一緒に遊びを進めているからこそ起きるであろう問題とぶつかるいい機会となった。1日目に自分のクラスの友達と遊んでいるときは、互いに分かり合っていたことが、2日目には受け入れられないなど、時と場合、相手によって変化する状況にこれからも出会っていくだろう。様々な人の多様な考え方に触れていくことで、その時その時の状況に応じて、どうしたらいい関係を築いていけるのかを考えていけるようにしたい。また、「何でうまくいかないのだろう？」というもやもやした気持ちとも向き合っ、そのもやもやを自分なりの方法で解決していけるように、一緒にたくさん経験していきたい。（『困難を乗り越えようとする姿』，『自分の考えや気持ちを様々な方法で表現する姿』）

次にどうしたいのか・どうすればよいのか

- ・自分の思うように進まない状況や自分の考えと相手の考えがすれ違う状況で、F男が自分の感情とどう向き合うのか、また、どのように解決していくのかを、場面を捉えて観察していきたい。

↓

その後、自分の考えと相手の考えが合わなかったり、自分の思いを無理に通そうとしたりしてトラブルになることが定期的に見られている。まずは、どうにかして自分の思いを通そうとする姿や、自分たちで何とか解決しようという姿を見守り、必要に応じて仲介に入ったり、状況が進展する、もしくはこれまでの経験を思い出せるような言葉をかけたり、視線を送ったりしている。仲介に入ると、互いに言い合うだけだった状況に「相手の話を聞く」という要素が加わるため、徐々に冷静に考えるようになっていき、解決へと至っている。自分の思いを無理にでも通そうとすることに関しては、今、F男の周りにいる友達には納得できないことには必死に抵抗するため、F男にとっていい環境だと考える。（無条件に受け入れる友達ばかりだとF男が自分の行いを振り返るのは難しいと考えられるため。）F男は自分の（一方的な）思いが友達に受け止めてもらえないというもどかしい状況を経験しながら、もやもやしたり、いらいらしたりする自分と向き合っている。

この事例では、芋掘りをみんなで楽しんだという共通体験が基になっている。保育者はその共通の体験を協同して遊ぶ姿へと繋げたいと考え、環境を準備した。初日に一緒に遊んだのは、年中児から同じクラスだった友達がほとんどで、気心が知れていた。また、担任も一緒に遊んでいたこともあり、F男は大きな紙に興奮しながらも、安定して遊んだ。「自分のイメージするように描きたい！」という思いはもちながらも、そこに他の友達が入ってくることを拒まず、一緒に楽しもうとする姿も見られた。安心できる相手と、共通の体験・共通の目的をもって楽しさを感じながら遊びを進める中で協同性が発揮されたのではないかと考える。しかし、2日目に一緒に遊ぶメンバーが替わると、様々なトラブルが起きたことから、本当の意味でこの遊びを楽しむにはどのような援助が必要だったのか、また、様々な場面で協同性を発揮するためには、今後、どのような援助をしたり、環境を整えたりしていけばよいのかを考えるきっかけともなった事例であった。

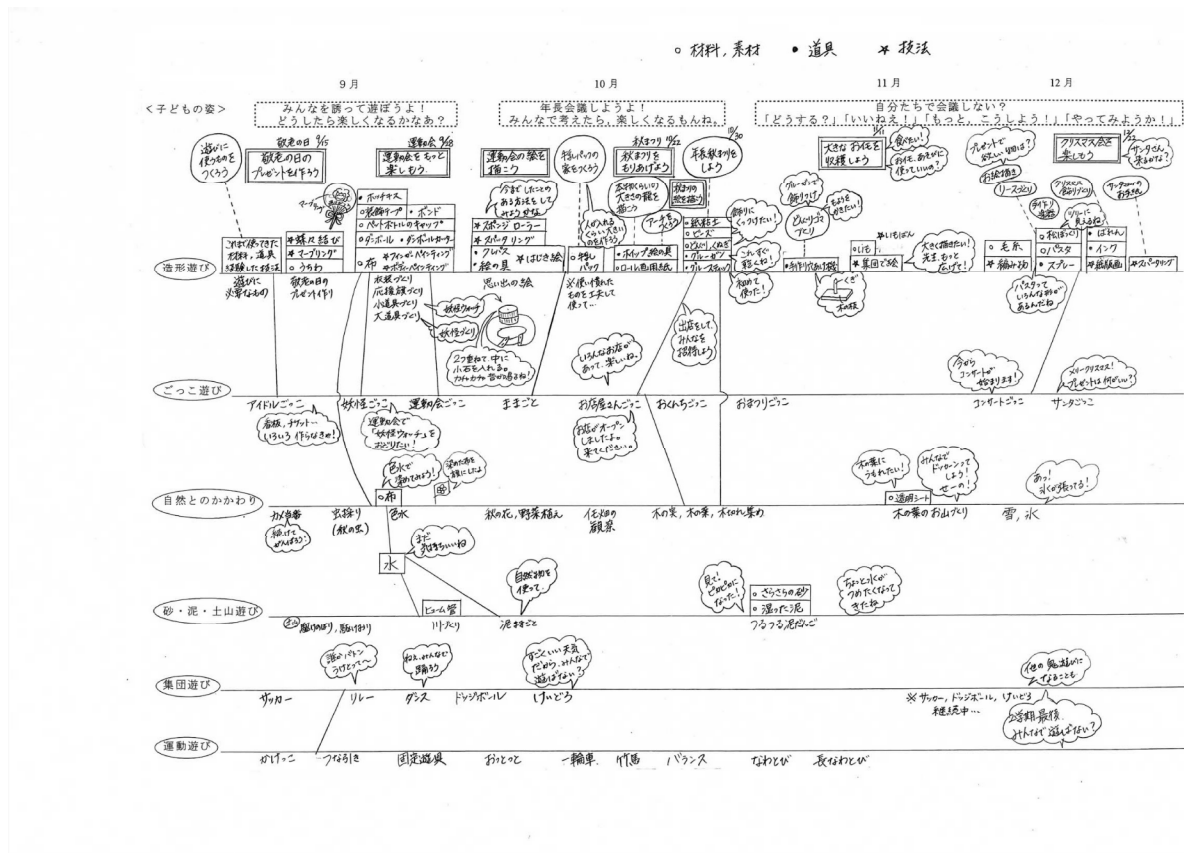
実際の事例を4つ挙げて説明したが、このように事例を通して、子どもの姿を見取り、考察をしていくことで、遊びの中の協同性がどのように芽生え、どのようにはぐくまれていくのか、また、そのためにはどのような環境や教師のかかわりが必要であるかにつ

いてこれからより深く検討していくための手がかりを今年度の研究を通して得たように思っている。

(2) 子どもの活動の図の作成

本園は、今年度11月に行われた全国造形大会で保育を公開した。その際、本園の造形表現活動において系統性・継続性を見直すこととなり、主に造形表現活動について今年度実践してきたことを「子どもの活動」というかたちで図に表してきた。(図1)

図1 子どもの活動



この図には、その時期の子どもの姿と、どのような活動(遊び)をしたのか、その活動を通してどのような道具・材料に触れたり、技法を経験したりしたのか、さらには他の遊びとどのようにつながっているのかなどについて記録していった。作成当初は造形大会に向けての取組として実施していたが、作成の過程で保育者から、「保育の系統性を以前より考えるようになった。」、「子どもの姿から子どもの心に寄り添う保育を心がけるきっかけとなった」、「“もの”、“こと”との出会いを通して、子ども同士がかかわり合うきっかけができた。」などという声が挙がったため、この活動の有効性を考え、作成を続けていくこととした。しかし、本来違う目的で記録してきた図であるため、書き方、記入する内容などを再考して、本園の研究テーマに沿った記録となるように模索しているところである。(図2)

図2 子どもの活動（研究に沿った視点を探るために更に書き加えたもの）

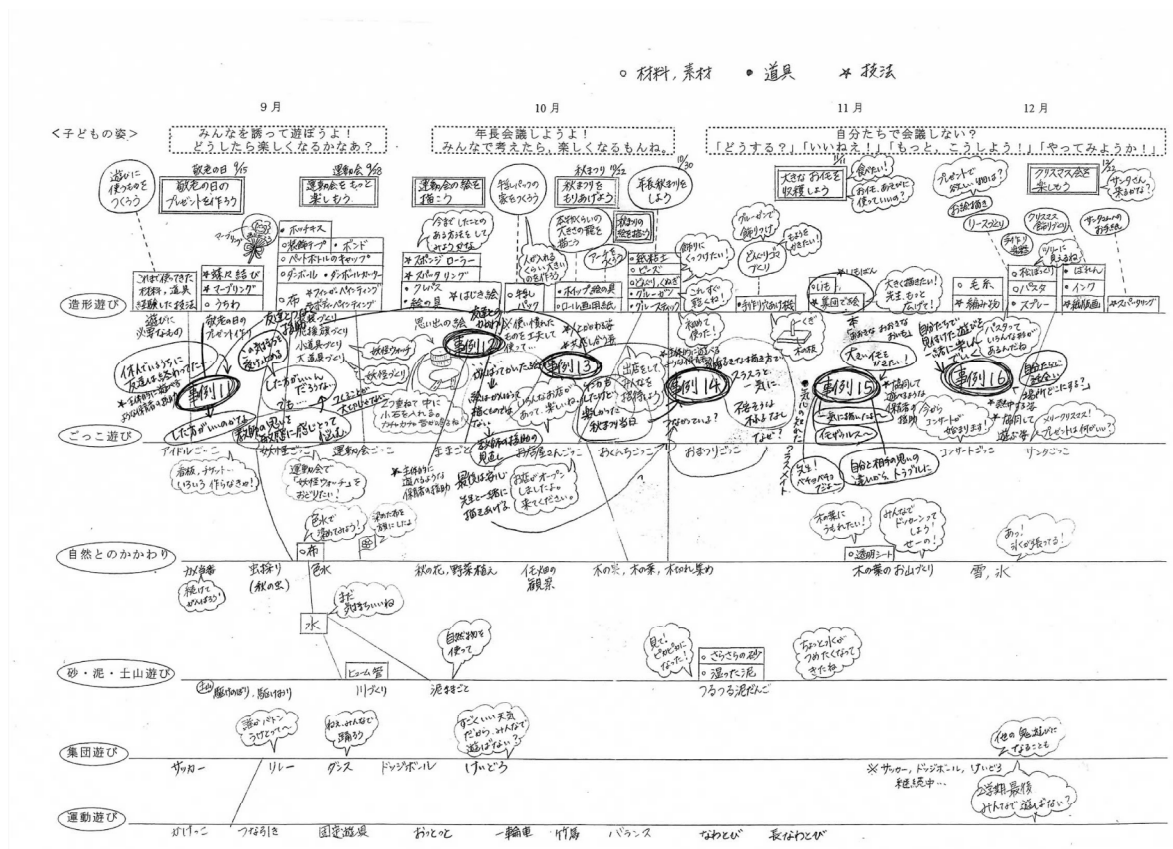


図2を見ても分かるように、まだその書き方などを模索している段階であるため、見づらく、協同性を探るという観点では、記入されている内容も不十分であるため、今後の課題として残し、改善・検討・作成を進めていく。

ここでは主に2つの取組を挙げたが、その他にも、研究会への参加や保育の公開などで様々な意見を聞くとともに研修を深めている。

3. 次年度に向けて

最後に、次年度に向けての取組として3点挙げる。

(1) 事例について、更なる改善を図る。

普段の保育の中で、遊びのつながりを考え、援助を講じていったことが少しずつではあるが保育者の意識改革、保育改善へと繋がっている。保育者が事例を挙げる際の研究に沿った視点も検討してきたため、今後はそのことを生かしつつ、よりしっかりと子どもの姿を見取り、考察を深めていけるようにしていく。その中で特に、「熱中する姿」を見取することを重視し、その姿をより具体的に分析・解釈していくことで、子どもたちが「誰と、どんな場所で、どんなことをしているときに夢中になっているのか」、また、その姿から、「何を感じ、何を求めているのか」を考察し、子ども理解を図りつつ、次の保育へと生かしていくようにしていく。そして、その過程の中で「主体的に遊ぶ姿」や「協同して遊ぶ姿」を見取り、その際、どのような環境設定や教師の働きかけが有効であったか記録していく。

（２）子どもの活動の図の再考・作成をする。

造形大会に向けて作成した 26 年度分の子どもの活動の図（活動の記録）を基に、本園の研究の内容に沿った子どもの姿や遊び、また、それを引き出す有効な環境設定や教師のかかわりなどの記録となるような図を再考し、27 年度版の活動の図（活動の記録）を作成していく。

（３）保育指導案の形式を見直す。

これまで書いてきた指導案の形式を基に、それまでの子どもの学びの姿や経験、更には本園の研究がより明確に見えてくるような指導案の形式、書き方を模索し、実際に改善・作成し、保育を行っていく。さらに、保育を行った後にその形式がどうであったかを検証し、更なる改善を図っていく。

参考文献・資料

- ・「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」
幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方に関する調査研究協力者会議
（平成 22 年 11 月）
- ・「子どもの心が見えてきた」
福島大学附属幼稚園（2011）